百笑徒然袋序 斐然成章

嘗以杜撰為俳諧也。李重之。緣之排其言。就而視之。無根多筆称俳諧。来當此語也。不若為一笑人也。驟見台之西。隱士少枯之。而伐倚盡也。圖画怪状。驚駭太倍。

由是。遂以貫花稱之名。

亦不匪乎。今來深示讀

此圖者多矣。圖多為謝混

而綴。又畫多似江淹筆。

鳴呼如之何。寧使家君之事

後名。亦知多附一篇。酒為書

從其而得而同樂彩枝。且

一時也。本草。書類叢。任才
篤。採擷實驗。圖以為三
巻。題曰本草達鑑。而請序
余。予先再辭。而乃書云。
如何歸也。而免本為古者必矣
之。乃嘗之思。生若生而一定。
苟而止之纂。右勤子霽序。

于時也甲辰春

元洲徐書幹

叙

畫鈎に化を寫想妙法は筆に化哲の廉
なりし以つ是ゟは寶来庵しがに七十二變
石燕洒落世哉百鬼夜行の發端より濱
編まるを其ゝ辞を濱子の書き世哉に年
又まゑんや化物とりて器鬼に化す一字
返音の題と柴折しく古き調度ゆ魂を
こらし物化自在と画てこえふゆれとさ

らひとて人をとる人細やかなる事毛を割ら
ぬしさるは老らくは目鏡つきあるとも及ぶハ
所まさくハ尺風之ぶ能も著以哉月画手ハ
室なる色しと見え住まて京傍ら流告
贈り得たるを紙東都神田啓書人

春雨に花を打てつらくなるといふ人は中山翔子
なにも袖より小冊去依の肖兄を見るとやら美人頃出す
詠ひに譜して例様なるまて皆其の化しける様に
昔や繪なる子童を描きて見るに朧朧きり
なれい庭雨にたゆるともなく蕭する家居にまきりぬ
まむ人もなれれい壊おち新あらいにて必中の嵐に訊
すゝ月のはすへ寄へてもなき御所にもや津瀬遠侍

あし也残り。麓ふかく木葉が埋む七里か郷せき尾あり

もらせるまし。あまてしと古比と思ふの心ゆうらく体へ

もとめかに。所に立む風のさむを吹と也ともに有あり洞夜

うか比れ出を虫をしるらとくあれ。木しの姿の事をも

怪しげに有りもかくれにき見んかと質も是一睡の夢にして

強あそふ童の抽纏りも猶へず。あらそらふあるものとれの筆

探く夢見しまさと思ふ清しく識としまなかのと

於月窓下石燕題序

畫圖百器徒然袋巻之上

塵塚怪王

大道蓮森羅萬象いからそうくちをなせるそのうち長たるかならずとなし麒麟ハ獣の長鳳凰ハ禽の長たるよしなれバちりづかの怪王ハちりつもりてなれる山姥とうの長なるべしと夢のうちにおもひぬ

文車(ふぐるま)妖妃(ようび)

歌に古しへの文見し人のたまなれやおもへハあかぬ白魚(しみ)となりけりとかしこき聖(ひじり)のふみにもみえしさへかくのごとしましてや執着(しふぢやく)のおもひをこめし千束の玉章にハかゝるあやしきかたちをもあらはしぬべしと夢の中におもひぬ

長冠（おさかぶり）
東都の城門にかけし世をのがれし賢人の冠にはあらで あのよかしはのふるきおもてありし 佞人のかむりか かんむりしと夢心におもひぬ

昝類

鄭瓜州が瓜田に怪ありて瓜を
啖ふ霊隠寺の僧これをきゝて
符をあたふ是を瓜田におくに
怪なかりしいくばくのち其符を
ひらき見るに李下不正冠の
五字ありしと
ころくかの
怪みて
夢けらるよ
かとしらぬ

ばけの皮衣
三千年を経る狐
藻艸をかぶりて
北斗を拝し美女と
化るよし唐の書に

絹狸（きぬたぬき）

腹（はら）つゞみをうつと言へる
ためし有る玉川の
ほとりなる八丈の
きぬ狸とは化（ばけ）しもなと
ゆめの中におもひぬ

古籠火

それ火に陰火陽火鬼火をあぐ
あらしぞうけく古戦場には汗血
のこりて鬼火となりあやしきかたちを
あらはすよしをきくといへどもいまだ燈籠の火の
怪をなせしことをきかずして夢の中におもひぬ

天井嘗
天井の高ハ燈くらくして冬さむしと
されど家づくりの故にもあらず
まつたく此怪のなすわざにて
ぞつとするなるべしと
夢ごゝちにおもひぬ

白容裔
白うるりハ徒然のならいなるよしこの白容裔ハふるき布巾のばけたるなれども外にならいもなぐると夢のうちにおもひぬ

骨傘（ほねからかさ）

北海（ほくかい）に鴟吻（しふん）と云る魚あり かしらハ龍のごとく
からだハ魚に似て雲をおこし雨をふらすと
古きからかさも雨のゑんによりて
かゝる形（かたち）をあらハせしにやと
夢のうちにおもひぬ

鉦五郎

黄金の鶏ハ泥屋辰五郎が家にたからなりしよしはかねも鉦五郎と云るうちハ金そやあるまんと

夢のうちて　たかひね

払子守
趙州無の則に狗子にさへ仏性ありとかや
まして伝燈をかゝぐる禅の床に
九年があひだくちふりし
払子の精は
結跏趺坐せし相をあらはすべしと
夢のうちに
おもひぬ

栄螺鬼

雀海中に入て
はまぐりとなり
田鼠化して
鶉となるためし
もあれハ造化の
なすところ
さゞえも鬼と
なるまじきに
にもあらずと
夢のうちにおもひぬ